

平成30年 7 月豪雨災害における当院救護班の活動

澤 田 泰 幸

要旨：6月28日から7月9日にかけて、台風第7号及び梅雨前線の影響により、西日本を中心に広い範囲で長時間の大雨になり、7月の降水量が多く、地点で観測史上1位となるなど、記録的な大雨となった。大雨特別警報の発表は福岡・佐賀・長崎県、ついで広島・岡山・鳥取県が発表し、最終的に1府10県が発表となり、周辺の県においても多くの警報・注意報が発令された。全国における死者は221名、行方不明者は9名、負傷者は390名、住家被害（全壊から床下浸水までの被害）は50,568棟と大きな被害となった。（9月3日現在：消防庁情報）平成30年7月豪雨の被害の特徴は、河川の氾濫による洪水、陸地内での増水による浸水、地すべりや崖崩れなどの土砂災害が発生し、33の道府県に被害をもたらした。また、自宅の一階部分は被害を受けたものの二階部分は無事であったため、在宅避難の方が多くみえた。さらには、過酷な猛暑により熱中症で体調を崩される方が多く、避難生活や復旧作業に多くの困難が生じていた。

【活動の内容】

当院救護班は日本赤十字社岐阜県支部長の命令を受け、同社広島県支部災害対策本部に派遣され、被災地の医療機関に生じた混乱が回復するまでの空白を一時的に埋めるために、避難所救護所の運用および、周辺地域の巡回診療を行った。

広島県は死者108名、行方不明者6名、負傷者127名（同現在）と、今回の災害で最も人的な被害を受けた。

活動場所となったのは、呉市（県内において最も多い25名が亡くなられた）の東に位置する安浦まちづくりセンターで、7月22日から24日までの3日間、第3ブロック第4班として活動を行った。

■ 7月22日

午前11時前に安浦まちづくりセンターに到着し、センターの館長に活動の挨拶を行い、その後、避難所のアセスメントを実施した。同時刻、救護所の立ち上げを行い12時より診療を開始し



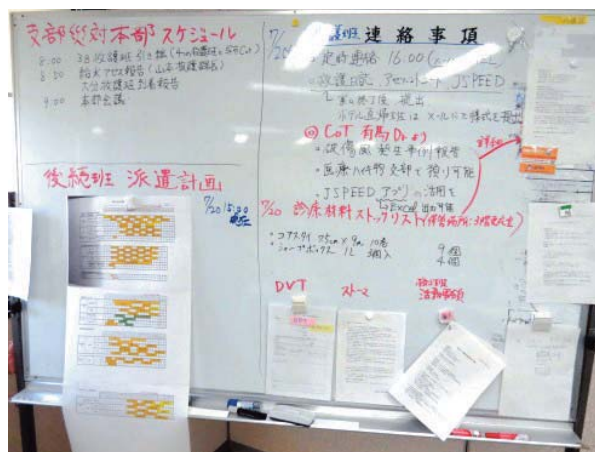
出発式での院長挨拶



出発式での救護班員



富山県救護班からの引き継ぎ



本部に集められた情報の数々



巡回診療に係る保健師と打合せ



巡回中の山間部の様子

た。

また、地域内において巡回診療の必要性が高く巡回診療に向け保健師会に挨拶を行い、保健師の人員調整をしていただき、2つの班に別れ6世帯に実施した。巡回の対象は災害時に自力での避難が難しく、第三者の手助けが必要な高齢者、障害者などの災害弱者（避難行動要支援者）で保健師会がリスト（538名11の地域）を管理・運用していた。

20時20分に最後の患者様に診療を実施し、宿舎に向かった。

■ 7月23日

8時30分に安浦地区医療関係者ミーティングに参加し、夜間の状況や当日の流れについて情報共有を行って、午前9時から診療を開始した。

午前の巡回診療は18世帯に実施し、うち1名の方が心疾患の処方薬が8月1日までということで、救護所でも処方できることを案内した。午後は8世帯に巡回を実施した。

浜松市保健師会が静岡市保健師会と交代となり、新たに情報共有し関係構築を図った。

16時30分の安浦地区医療関係者ミーティングに参加して報告を行い、17時に診療を終了した。

■ 7月24日

8時30分に安浦地区医療関係者ミーティングに参加して情報共有を行い、当救護班は本日をもって活動を終了し、次の班に引き継ぐことを報告した。

診療を午前9時から開始して18時30分まで、巡回診療を午前6世帯、午後5世帯に実施した。



避難所に寄せられた物品



被災地を巡回する看護師



家財が出されている様子



山間部の様子

また、呉市保健所合同ミーティングが午後に行われ副班長と連絡調整員が参加し、現在の避難所や周辺地域の様子について報告し、今後の対応を話し合った。

3日間を通した患者の主な症状は、被災した自宅の整理の際に切り傷や擦り傷をした被災者や熱中症の疑いで受診に来る患者や避難所生活の疲れによる疾患が多く、医師や看護師は、被災者の話に寄り添いながら、延べ39名（周辺地域の方、避難所生活の方、ボランティア）の診療を行いました。

巡回診療は、延べ43世帯5地区を巡回しました。

【活動を終えて】

今回の活動では、日赤の災害医療コーディネーターチームと地元の医師会や各医療機関などが連携し、被災地における医療救護体制について話し合いながら活動を行った。

同対策本部と報告・連絡を密にし、現場と本部の情報に溝が出来ないように努め、朝と夕に避難所で行われる安浦地区医療関係者ミーティングに参加し、各関係機関（静岡県浜松市保健師会、山口県庁、広島県薬剤師会、看護協会、日赤こころのケアチーム、鍼灸マッサージ合同チーム）との情報共有の場で連絡及び調整を行った。

救護班はどこにどのような医療が求められているのかを実際に現場へ足を運んで調べる必要があり、アセスメントは全ての基本となる活動であることを再認識した。



被災地に手向けられた花



避難所救護所での診療の様子



避難所でのミーティングの様子



巡回診療の様子



活動を終えて

活動期間において、現場のニーズに沿った活動ができたことは手厚い後方支援があつてのことで、活動前から周到な準備をしてくれた社会係長にはすべての班員が感謝している。

今後は各施設での取り組みを共有し、赤十字の特色である災害救護の機能強化がさらに図られるように携わっていきたい。